

政策研究に求められるもの

中村学園大学栄養科学部フード・マネジメント学科 教授 薬師寺哲郎

「すぐ役に立つ本はすぐ役に立たなくなる」とは元慶應義塾大学塾長の小泉信三氏の言葉である⁽¹⁾。実はこの言葉は小泉氏のオリジナルではなく、ある学部長が、実業界からのすぐに役に立つ人間をつくってもらいたいという要請に対して、「すぐ役に立つ人間はすぐ役に立たなくなる人間だ」と応酬したことを至言として借用したものである。しかし、同様のことは政策研究にもあてはまるのではないだろうか。移り変わりの激しい時代である。すぐ役に立つ研究があるとすれば、それはすぐ役に立たなくなる可能性が高い。以下では、この言葉を出発点に、農林水産行政と農林水産政策研究所それぞれ約20年にわたる筆者の経験を踏まえて、いわゆる政策研究には何が求められるのかを考えてみたい。

農林水産政策研究所の研究は、行政部局の日々の課題解決に貢献するという意味では、仮にすぐ役に立たなくなるとしても、すぐ役に立つような研究への要請に対応しなければならないことは確かにある。しかし、こうした研究は可能な限りこれまでの蓄積を生かして効率的に処理しつつ、できるだけ息の長い、耐用年数の長い研究、できるだけ長く参照されるような研究を目指すべきであろう。例えば最低10年は参照され続ける成果を目指したい。このことは、換言すれば、フローとして毎年消費される消耗品のような研究ではなく、研究ストックとして蓄積され、長い年月にわたって関係者にその果実をもたらすような研究成果を出していくことでもある。

ではどのような研究が息の長い研究かといえば、行政の隠れたニーズを満たすことこそが重要ではないだろうか。研究へのニーズは、必ずしも関係者に認識され、顕在化しているとは限らない。重要なのは、現在は気づいていないが、現にニーズとして存在するもの、あるいは将来ニーズとして顕在化する可能性のあるものである。これらのニーズを満たす研究は新たな政策展開への示唆を与える可能性がある。ただし、残念ながら現在どのような潜在的ニーズがあるかは筆者にはわからない。この条件は高いハードルかもしれない。

そして、重要なことは研究と行政の間の「言語の翻訳」である。その際に不可欠なのが両者の間の日頃からのコミュニケーションであるが、理想的なのは研究の方に行政の言葉をキャッチできる者がおり、行政の方にもある程度研究の言葉をキャッチできる者がいることである。「翻訳」には二つの局面があり、一つは研究成果の発信の局面、もう一つは課題設定の局面である。前者の局面では、政策研究の場合、せっかくすばらしい研究成果ができて、それが政策担当者に理解されなければ意味がない。このため、成果のわかりやすい発信が求められる。ところが研究者と行政官ではおのずと使い慣れた言葉に違いがあるので双方向の翻訳作業が必要になるが、これは最近はやりのAIにはできない高度な作業である。一方、課題設定の局面では、研究のニーズがあっても、行政官は必ずしも研究方法には詳しくないので、そのニーズを満たす研究課題や研究方法を考え、最適な手法に翻訳して提案するのは研究側の仕事である。

最後に、政策研究と政策提言に関してである。政策研究は何らかの政策提言を行うものだという考え方があろう。しかし、筆者は、そうである必要はなく、むしろ重要なのは現状分析であると考えている。現状が正しく理解されていれば、おのずかるとるべき政策の方向は決まってくるものである。そして、研究成果を政策に生かし、とるべき具体的措置を考えるのは行政の方が得意とすることである。農林水産政策研究所の前身である農業総合研究所の初代所長であった東畑精一氏は、「総研では、＜どうする＞よりも、＜どうなる＞が大事だ」と言っていたといわれる⁽²⁾。



(1) 小泉信三『読書論』（岩波新書）。

(2) 農林水産省農業総合研究所『総研四十年』。